

資本主義社会の「富」とはなにか

--- そのフェティシズムをめぐって ---

What is ■the Wealth■ of the Capitalistic Society?

--- On its Fetishism ---

篠原 三郎

Saburo SHINOHARA

Abstract

This paper aims to reconsider the character of the social wealth. The form of the existence of the social wealth is not single or simple. Generally the commodity has been estimated as the wealth in the capitalistic society. But we should become aware of the existence of the wealth in the form of non-commodity. In addition, we should consider how the social wealth ought to be.

目次

まえがき

1. 「社会の富」の歴史性
2. 使用価値のフェティシズム
3. 商品関係の全面化と人間

あとがき

まえがき

過日、『朝日新聞』紙上で、作家大江健三郎氏との往復書簡の相手として紹介されていた「アメリカの良心」とも形容されているというN. チョムスキー氏の発言が印象的であった。また共感している。その氏は、「資本主義の市場システムによる環境破壊」問題にかかわって、つぎのように述べている。

* Former professor, Faculty of Economics, Nihon Fukushi University

「これからの世代が生存できる可能性を破壊している。市場は、お金を所有し、お金で参加する人の利益しか反映しない。市場システムにとって、生まれていない子孫は市場に参加できないので価値がなく、短期のことしか考えなくなる。完全な市場とは自滅的なシステムといえる。だから、正常に機能している国は、自分たちの利益と富だけを最大限に追求する権利組織を何らかの形で制限して、完全な市場システムを受け入れてはいない⁽¹⁾」

「完全な市場とは自滅的なシステム」といわれているこの市場システムに登場してくるのが人間の生活を支えている商品である。商品を欠いては、わたくしたちは生きれなくなっている。商品は「富」であるのだ。経済学という学問がその生誕以来、「富」とその増加の追求の、いってみれば、経済成長の研究であったのも、それゆえのことである。しかし、商品が供給されるその市場システムが「完全な市場」となれば、「自滅的なシステム」になるという。恐ろしいことだ。商品の市場システムがグローバル化している今日、このシステムの自滅がたどる道は、人類の死しかありえない。だとすると、こんにち、「富」の社会的なあり方を考えるということは、いかに生きるべきか、という問題にもなるように思える。

本稿は、上述のようなことを念頭に、資本主義社会の「富」とは何かを、自分を納得させるために考察していくものである。そのため、わたくしちの力量もあって、基礎的な事柄からはじまってジグザグした展開になっていくことをお断わりしておきたい。

1. 「社会の富」の歴史性

周知のように、マルクスの『資本論』は、「資本主義的生産様式が支配的におこなわれている社会の富は、一つの「巨大な商品集合」として現われ、個々の商品は、その富の元素形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる⁽²⁾」

資本主義「社会の富」であるこの「商品の分析」のあり方を読んでいくとき、とくに使用価値をめぐるのは、わたくしちが現代社会を解明していくにあたって、あらためて考えていかねばならない諸問題に当たっていくように思えてならない。

商品は、マルクスが述べているように、胃袋であれ、空想からのものであれ、まずもって人間の「欲望をみたす⁽³⁾」ものでなければならない。思えば、「欲望」のあり方は、人間の生き方を表しているものである。人間の「欲望」に対するこのような物の有用性がその物を使用価値にしているとされている。これが商品の使用価値規定であるが、しかし、その使用価値が商品であるためには、なにより価値（ないし、交換価値）でもあらねばならない。できれば、自分の所持する商品には高い交換価値がつくことを期待したい。使用価値は、そのための手段的役割におかれざるをえないのである。商品は、そのような使用価値と価値（ないし、交換価値）の二つの要因を備えてこそその存在形態なのである。

ところで、「交換価値は、まず第一に、或る一種類の使用価値が他種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現われる⁽⁴⁾」とあるように、価値は、交換関係に立たされては

じめて現われてくるものなのであるが、交換関係に入らない使用価値も存在しうることである。マルクスは、したがって、つぎのようにものべている。

「或る物は、価値ではなくても、使用価値であることがありうる。それは、人間にとってのその物の効用が労働によって媒介されていない場合である。たとえば、空気、処女地、自然の草原、野性の樹木、等々。或る物は、商品ではなくても有用であり、人間の労働の生産物であることがありうる。自分の生産物によって自分自身の欲望をみたくものは、使用価値はつくるが、商品はつくらない。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値、社会的使用価値を生産しなければならない。⁽⁵⁾」

なお、マルクスのこの叙述だけでは、(生産者以外の人によって消費される生産物は何でも商品とみなされるかのような)「誤解⁽⁶⁾」がしばしば生まれたからとのべて、エンゲルスは、わざわざ、ていねいに、マルクスのこの叙述のあとに、以下のような説明を付け加えてくれている。

「しかも、ただたんに他人のためというだけではない。中世の農民は領主のために年貢の穀物を生産し、僧侶のために十分の一の穀物を生産した。しかし、年貢の穀物も十分の一税の穀物も、他人のために生産されたということによっては、商品にはならなかった。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役だつ他人の手に、交換によって移されなければならない。⁽⁷⁾」

要するに、使用価値、ないし、「富」のあり方として、商品の形態をとらないものがありうるということだ。エンゲルスが例示していたような中世社会の領主のための「年貢の穀物」などは、交換によっているのではないので、商品とはならないし、今日の例でも、同じ理由から、知り合いからもらう贈物をはじめ、自家菜園の野菜なども、あるいは、ボランティア労働なども、有用であり、使用価値をもちながらも、文字通り、商品としての対象から外れる。したがって、資本主義の「社会の富」とならないでいる。

このように、「社会の富」のあり様は、歴史的にも変ってきているし、商品経済が文字通り全社会的に支配的となろうとしている資本主義社会にも非商品経済があるということである。ただ、この社会では「富」とならないため、脚光を浴びることなくシャドーになっているにすぎない。「近代社会の経済的運動法則を明らかにすること⁽⁸⁾」を「最終目的⁽⁹⁾」としている『資本論』では、その限りで、非商品経済のことが言及されたり、捨象されているのである。前掲の野菜や贈物をはじめ、あげれば切りのないほどの非商品的な「富」に支えられて、実は、資本主義社会も、存立している。その最大のものは、またあらためて挙例しておけば、ジェンダー問題とかかわって注目をあびるようになった家事労働であろう。炊事、洗濯、育児、介護、出産、等々といった、いわば、労働力の再生産にかかわる家事労働がなければ、資本主義社会は存続できないはずだ。にもかかわらず、交換関係を経由していないので、商品扱いとされない。GDPにも、GNPにも算入されない。「社会の富」となっていないのだ。しかし、主として女性が担わざるをえなかったそれも、女性も労働力商品として賃労働に参加できる条件がきるようになり、それと関連しながら、家事労働が外部化され、社会化され、商品化の対象とされてきてはいるが、多くは依然として非商品形態をとって行なわれている。

たびたび繰り返すように、また思えば、当り前のことなのだが、社会の総体は、商品経済の世界のみをその対象としてたのでは、十全に捉えきれぬものがあるということだ。その意味で、家事労働に陽があたり、論じられるようになったことは、意義あることだ。商品形態をとらない「社会の富」のあり方を含めて分析していく必要があるのだ。しかし、使用価値が商品形態をとっているか、そうでないかによって、その物の使用価値の社会的意味は大いに違ってくる。身近で日常経験していること、出来事を想起すれば足りることであろう。

しかしながら、『資本論』では、以下のように、商品の使用価値は、「富の素材的内容」、ないし、「交換価値」の「素材的担い手」と位置づけられ、「商品学の材料」を提供するものと規定されるだけで、それ以上の考察からは外されてしまっている。

「或る一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。しかし、この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄、小麦、ダイヤモンドなどという商品体そのものが、使用価値または財なのである。商品体のこの性格は、その使用属性の取得が人間に費やさせる労働の多少によるものではない。使用価値の考察にさいしては、つねに、何ダースの時計、何エシのリンネル、何トンの鉄というような、その量的規定性が前提される。種々の商品の種々使用価値は、特殊な一学科、商品学の材料を提供する。使用価値は、ただ使用または消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわらず、富の素材的内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態の場合には、それは同時に素材的担い手となっている——交換価値の。」¹⁰⁰

「商品学の材料」となる使用価値概念の一般的規定の仕方としては、このような説明の「富の素材的内容」、「素材的担い手」で許されるかもしれないが、社会科学に登場しなければならない現実世界に存在している使用価値は、特定の社会的歴史的な規定をうけてあるものである。商品形態をまとっている使用価値は、交換関係下において価値とともに共存している。商品は相手と交換するため、あるいは、売るためのものであるから、すでにみてきたように、その使用価値は、その所持者の「自分自身の欲望をみたすもの」ではなく、買い手である他人の「欲望」を満足させる「他人のための使用価値」でなければならなくなっている。売買（あるいは、交換）という売り手と買い手との商品関係たる社会関係のなかで、その使用価値の性格は規定されているのである。そればかりでなく、それ以前に、その物の使用価値は、他に無限に存在しているであろう物のなかから選ばれ、交換関係に入っているのである。しかも、なにより、買い手である人間の「欲望」自体が、商品経済によって社会的にすでに規定され、形成されてあるのである。けっして非歴史的にあるのではないのである。その物を使用価値にしたその物の有用性は、その「商品体の諸属性に制約されている」ものの、その「諸属性」そのものではなく、商品世界と商品関係のコンテキストのなかで社会的に歴史的に形成された存在だということである。

2. 使用価値のフェティシズム

ところで、「社会の富」のあり様は、さきにも指摘しておいたように、商品経済の展開と関連しながら、歴史的に変わってきている。マルクスは、以下のように述べている。

「商品交換は、共同体の果てる場所、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる。諸物の量的交換比率は、最初はまったく偶然である。それらの物が交換されうるのは、それらをたがいに譲渡しあうというそれらの所持者の意思行為によってである。しかし、そのうちに、他人の使用対象にたいする欲望は、しだいに固定されてくる。交換の不断の反復は、交換を一つの規則的な社会的過程にする。したがって、時がたつにつれて、労働生産物のすくなくとも一部分は、はじめから交換を目的として生産されなければならなくなる。この瞬間から、一方では、直接的必要のための諸物の有用性と、交換のための諸物の有用性と分離が固定される。その使用価値は、その交換価値から分離する。他方では、それらが交換される量的比率が、それらの生産そのものによって定まるようになる。慣習は、それらの物を価値量として固定する。¹¹⁾」

このような「商品生産がさらに発展するにつれて、どの商品生産者も、諸物の神経 [nervus rerum] 「社会的物質」を確保しなければならなくなる。彼の欲望は絶えず更新され、絶えず他人の商品を買うことを命ずる¹²⁾」。そして、「交換価値を商品として固持する可能性とともに、黄金欲がめざめてくる。商品流通の拡大につれて、貨幣の力が、すなわちいつでも出勤のできる絶対的に社会的な富の形態の力が、増大する¹³⁾」ようになると、マルクスは述べている。

歴史のはじめに、このように、「諸共同体」のあいだに、したがって「共同体」の外部に部分的に発生してきた商品経済が発展し、「共同体」の内部に侵入し、内部に機能していたそれまでの生産関係を破壊しつつ、やがてはすべての社会関係を商品経済に置きかえ、ついには、市場システムで覆い尽くそうとする資本主義が成立してくる。

「資本主義的生産様式」の特徴は、利潤目的のための生産である。より多くの利潤を追求し、資本蓄積を重ね、拡大再生産をつづけようとする。資本とは、もともと、そのことを本質としている。その資本が経済を支配しているのである。マルクスは、『資本論』の「貨幣の資本への転化¹⁴⁾」のところで、こう述べている。

「資本としての貨幣の流通は自己目的である、というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動のなかだけに存在するのだからである。それゆえ、資本の運動には限度がないのである¹⁵⁾」。「この運動の意識ある担い手として、貨幣所持者は資本家になる。彼の一身、またはむしろ彼のポケットは、貨幣の出発点であり、帰着点である。あの流通の客観的内容——価値の増殖——が彼の主観的目的なのであって、ただ抽象的富のますますの増大する取得が彼の操作の唯一の起動的動機であるかぎり、彼は資本家として、または人格化された、意志と意識とを与えら

れた資本家として、機能するのである。したがって、使用価値はけっして資本家の直接的目的として取り扱われるべきものではない。⁶⁶⁾」。

したがって、資本主義的市場経済下の商品は、利潤追求のための商品であって、買い手である、たんなる「他人のための使用価値」であるだけでなく、利潤が得られなくては始まらないものである。買い手の「欲望」を満たす有用なものであるとわかっているにもかかわらず、利潤が確保されない限り、かかる使用価値は、商品市場に登場してこない。このような使用価値を求めようとすれば、非商品的世界を探険しようとするしかない。それに反して、利潤が得られるとあれば、勝手な理由をつくりあげても、「他人のための使用価値」を装って、つぎつぎと新しい商品が売り出されてくる。利潤追求という資本の本質に規定された使用価値が商品として生産されるしかない。商品の使用価値は、たんなる物ではない。再三、繰り返すように、資本主義では資本という社会関係に規定された社会的な存在なのである。したがって、使用価値も、そのような特徴をもたざるをえない。にもかかわらず、商品の使用価値を直ちにその物の属性とみてしまうのは、また、そのものとしてしかみえないのは、商品の価値が商品体の自然的属性とみえるのと同じよう、使用価値のフェティシズム⁶⁷⁾というものである。しばしば、他でも挙げられている例をとれば、ズボンとスカート、前者が男性向き、後者が女性向きとみえるのがそれである。男性がスカートを着用してもいっこうに構わないはずだ。

商品は、物だけではない。資本主義を資本主義としてもっともよく特徴づけている労働力という商品がある。労働力も商品となれば、商品としての規定を帯びざるをえないし、また労働力の商品化が全社会的に進展していけばいくほど、儲かるものを探して物の商品化もいっそうすすんでいく。前述しておいたことだが、家事労働から解放され、女性の労働力もいっそう商品化されるようになれば、家事労働がやがて外部化され、社会化され、商品化されているだけでなく、それに関連した新しい商品の種類も増えていく。

労働力の売り手になれば、労働者は、「他人のための使用価値」になりうることを買い手にアピールしなければならない。そのための準備と工夫と努力が、生まれたときよりわたくしたちが経験してきたように、強制的に必要なとならざるをえない。労働力を商品として売らなければ、生きていけないのが資本主義社会でのわたくしたちの“運命”なのである。

「他人のための使用価値」といっても、労働力商品の買い手である他人は、資本の担い手である資本家である。資本家は、利潤の追求を目的としている。労働力商品は、資本家に気に入ってもらえるような使用価値を身につけていなくてはならない。そのため、そのような労働力形成の必要にこたえていくように、教育のあり方も、教育制度のあり方も資本主義社会の要望にこたえるかのように用意されてくる。教育だけではない。研究のあり方も、そのように社会的に要請されてくる。労働力の使用価値は労働である。資本家は買い入れた労働力を利潤創出に効率よく使いたいわけだから、その目的に叶った労働力を購入したい。たとえば、男性労働者と女性労働者という点からこの問題を考えれば、森田成也氏がのべてもいるように、「資本は、労働時間の絶え間ない外延的・内包的延長を通じて、労働者の労働可能な生涯のすべての生活時間を奪い取る

うとする⁸⁸。「資本のこの内的衝動は、男女労働者のそれぞれにとってどういう意味を持つのだろうか。より正確に表現すれば、どちらが、資本のこの概念により合致した賃労働材料となりうるだろうか。それは、明らかに女性労働者より男性労働者である。女性の生物学的な身体リズム、すはわち月1回訪れる生理という短期的リズムと、可能性としての妊娠・出産という長期的リズムは、すべての生活時間を労働時間に転化し、労働時間のあらゆる隙間を埋め、労働可能な全生涯を労働時間に転化しようとする資本の衝動にとって制約となる。したがって、男性労働者のほうが資本の概念により合致した身体性をもっていると言える⁸⁹」と、資本家は判断するであろう。

資本家の価値増殖（利潤追求）という立場からみて、労働力の使用価値に相対的に制約が、また問題があるとみれば、その労働者を資本家は歓迎しない。労働市場で買いたたかれ、安い価格で、低賃金で我慢せざるをえなくさせられる。それどころか、その職種さえ性別によって区分されてしまう。女性は「第二の労働者⁹⁰」扱いされている。男も女も同等な人間であるという立場からみれば、これは資本による差別なのである。それは、資本主義が生みだしている社会的歴史的産物なのである。

労働力商品は、他の商品と異なり工場で、しかも短時日で生産されるようなものでない。そのためにも、資本主義は、資本蓄積を追求していく過程で形成する相対的過剰人口という失業者群を背景に、資本に必要な労働力を供給できる巧みな社会的機制を用意している。

相対的過剰人口という地獄には、性別という点からみれば、女性がまず放逐される。過剰人口扱いとされた女性は、生きていくためには結婚し、家族の労働力の再生産のための家事労働を専業としていくか、他に方法がなければ、「性」を商品として売っていく以外に救いがない。ちなみに、商品化された「性」は、商品社会では、「社会の富」となり、彼女の得る代金は、GDPに加算されるはずである。しかし、結婚をした妻は、社会の存続にとって不可欠な、有用な労働をしているにもかかわらず、「社会の富」の生産者になりえず、収入のある男性労働者である夫のシャドーにされ、パラサイトとなるのである。

女性が「第二の性」とされること、またドメスティック・バイオレンスが絶えないのも、その社会的根源に社会関係としての資本の支配があることと深くかかわっているといえよう。

しかし、資本主義経済の生産条件、労働条件が発展し、先述しておいたように、女性の労働者数も増大し、労働力の女性化という表現さえ生まれてくるが、ジェンダーに対する資本家の価値観の本質が変わってきたわけではない。女性労働者から管理労働者になるものも現れるし、資本家になるものも出てくるが、彼女らは、幸いなことに、資本の運動の都合に適合した条件をもっていたり、またそういうことを可能とさせる保障ができてきたからであり、それはそれで、男女が同等であるという点からみて、その限りでよいことであるには違いないことだが、その次元でまた、同性間、異性間で新しい差別が生みだされてくるものなのである。その限界を知るべきである。社会関係としての資本による性差別的な性格は一貫している。男と女のありようは区別、ないし、差異でしかないにもかかわらず、資本が区別や差異を差別に転化しているのである。それが

男女の身体的制約に直接原因があるかのようにみるのは、労働力商品の使用価値のフェティシズムに支配されているからである。労働力商品の使用価値とそれに対する見方は、資本主義が社会的歴史的に形成してきたものである。わたくしたちには、フェティシズムから解放されるための意識的、自覚的な努力が求められているのである。しかしながら、一方、資本主義経済自体も、歴史的に後期にいたれば、みずからのまた改革のための客観的、主体的社会的条件をもわたくしたちに危機感として提供せざるをえなくなっているのではなからうか。

3. 商品関係の全面化と人間

『資本論』で原理的に分析された資本主義から独占資本が支配する現代のような資本主義に発展してくると、この歴史段階に特徴的な資本過剰といった、資本の利潤追求にとり危機的な事態が常態化してくる。そのため、その商品経済的な解決を求めて、大資本間の競争も、周知のように、さまざまな経営技術を開発・駆使しながら、熾烈を極め、働くものの労働条件がより厳しくなる一方、利潤を生みださなくなった生産は、人間生活にとり必要であったとしても、整理され棄却されながら、あらためて商品経済のいっそうの展開がすすむ。たとえば、それまで非商品経済的に営まれていた私的生活領域にまで商品関係が浸透していく。かつて共同体が商品関係の侵入によって解体していったように、資本主義経済の周辺に配置され、その経済を支えていた私的生活領域がついに外部化され、社会化され、商品化されていく。また、「IT革命」とともに、生産、労働、流通、金融、等々、経済、経営にかかわるすべての過程が、資本に都合のよいように、いっそう合理化、効率化されていく趨勢は、女性が賃労働者として社会に進出していきやすい条件とも重なっているので、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業を支えていた社会的基盤も崩れていくに違いない。そういう状況に関連して非商品経済として、無償労働として営まれていた家事労働、労働力の再生産のあり方も、すでに言及しておいたように、見直されざるをえなくなるであろう。

問題は、すでに繰り返し強調してきたように、資本主義経済は、利潤追求を目的としている資本が社会的主体となって展開されているという点にある。

商品経済は、もともと、人間と人間の関係、あり方を、商品と商品の、商品と貨幣の、さらには、商品と貨幣と資本の関係へと展開していく経済、人間関係を商品経済の關係に物象化し、偏面化していく性格をもっている。この商品経済が人間社会に全面展開しようとするれば、この事態、そこに生きる人間にとって、なにを意味するものであろうか。商品の存在は、不安定なものである。こういう社会のもとでは、人間の生き方は、自ずから投機的にならざるをえない。売れるか、またいかに売れるかは、後にならなければ分からないのである。せっかくの商品も、したがって、その使用価値も売れなければ「社会の富」にもなれぬ無価値なものである。

資本は資本で利潤の追求にしか目がない。人類の将来のことを考慮することのない地球環境の破壊の元凶は、資本過剰時代の社会のあり方にもっとも広く深くかかわっている。ここで、「ま

えがき」に紹介した N. チョムスキー氏の「完全な市場とは自滅的なシステムといえる。だから、正常に機能している国は、自分たちの利益と富だけを最大限に追求する権力組織を何らかの形で制限して、完全な市場システムを受け入れてはいない」という、正鵠を得た鋭い発言内容があらためて想起されてくるのである。そのうえでのことであるが、「市場は、お金を所有し、お金で参加する人の利益しか反映しない」でいるだけでなく、お金を所有しているそのものの生き方をも商品経済的に制約していることを指摘しておきたいし、忘れてはならないことなのである。

あとがき

現代の資本主義は、このような商品経済を全地球規模にわたって展開してきてしまっている。したがって、そこでの諸問題もグローバルである。したがって、そこでの社会的諸矛盾の性格も人類社会を破壊しかねないものとなっている。恐ろしいことに、チョムスキー氏も指摘していたように、「市場システム」は人間を「短期のことしか考えなく」させる傾向をもっている。しかし、他方で、さきに触れておいたように、現代資本主義は、資本の側にも労働者の側にも、諸問題があまりにも深刻な問題であるがゆえに、克服していかねばならないとする危機感を生み出している²³ことも事実ではなからうか。そのためにも、現代の資本主義へのリアルな考察が求められるのである。であれば、資本過剰問題をよりいっそうの商品経済化の追求、グローバル化によって解決していこうとする、これまでの資本の論理にしたがうのみでは、現代社会の諸矛盾を深化・拡大していくばかりである。それとは逆に、むしろ、「社会の富」が商品形態をとって現われる「資本主義的生産様式」のあり方を大きく変容していく以外には考えられない。その意味からも、「自分たちの利益と富だけを最大限に追求する権力組織を何らかの形で制限」していくとするチョムスキー氏の提案に共感できるのである。

ともあれ、「富」のあり様は、商品世界の外に限りなくあるはずである。商品としての「社会の富」は、「富」のあり方の一つの形態である。人間の「欲望」をみたく一つのあり方にすぎない。それを絶対とか、あるいは、自然とみなしているのは、繰り返すように、フェティシズム²⁴にとらわれているからである。そこから脱出していくためにも、まずは、商品経済であることによって制約され、手段化され、交換価値のたんなる担い手の位置に置かれていた使用価値のあり方と、それに規定されているわたくしたちの生き方をあらためて問い直し、考え直していかねばならないのではなからうか。したがって、「まえがき」でものべておいたように、こんにち「社会の富」のあり方をあらためて考察しなおすということは、わたくしたちの生き方のあらたなる検討問題に通じていくのである。「富」も社会も、そのあり方は、歴史的存在なのである。

なお、本稿のテーマにかかわる例示として意識的にジェンダー問題を取り上げてきたが、このことは、現代の資本関係を、こんにち、いかに変容していき、いかなる新しい社会関係を創造していくかを考えていく場合、環境問題とならんでジェンダー問題が意外にもっとも身近な問題であり、新しい社会を形成していくにあたってのすぐれた試金石だと考えらるからである。

(2001年8月6日, 記)

注

- (1) 『朝日新聞』, 2001年6月12日.
- (2) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag, Berlin, 1953. S. 39 (『資本論』第1巻第1分冊, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳, 大月書店, 1971年, 67ページ)
- (3) K. Marx, a. a. O., S. 39 (邦訳, 第1巻第1分冊, 67ページ)
- (4) K. Marx, a. a. O., S. 40 (邦訳, 第1巻第1分冊, 69ページ)
- (5) K. Marx, a. a. O., S. 45 (邦訳, 第1巻第1分冊, 77ページ)
- (6) K. Marx, a. a. O., S. 45 (邦訳, 第1巻第1分冊, 78ページ)
- (7) K. Marx, a. a. O., S. 45 (邦訳, 第1巻第1分冊, 77~78ページ)
- (8) K. Marx, a. a. O., S. 8 (邦訳, 第1巻第1分冊, 20ページ)
- (9) K. Marx, a. a. O., S. 8 (邦訳, 第1巻第1分冊, 20ページ)
- (10) K. Marx, a. a. O., S. 40 (邦訳, 第1巻第1分冊, 68~69ページ)
- (11) K. Marx, a. a. O., SS. 93~94 (邦訳, 第1巻第1分冊, 156ページ)
- (12) K. Marx, a. a. O., S. 136 (邦訳, 第1巻第1分冊, 226ページ)
- (13) K. Marx, a. a. O., S. 137 (邦訳, 第1巻第1分冊, 226~227ページ)
- (14) K. Marx, a. a. O., S. 153 (邦訳, 第1巻第2分冊, 7ページ)
- (15) K. Marx, a. a. O., S. 159 (邦訳, 第1巻第2分冊, 16~17ページ)
- (16) K. Marx, a. a. O., S. 160 (邦訳, 第1巻第2分冊, 18ページ)
- (17) 使用価値のフェティシズムをめぐっては, 下記の拙稿を参照されたい.
篠原三郎「使用価値とは何か——そのフェティシズムをめぐって——」, 『日本福祉大学経済論集』第19号, 日本福祉大学, 1998年.
- (18) 森田成也「資本主義と性差別」145ページ.
- (19) 森田成也, 前掲書, 145~146ページ.
- (20) つぎの拙稿を参照されたい.
篠原三郎「第二の労働者——労働力の価値と性差別——」, 『日本福祉大学経済論集』第22号, 日本福祉大学, 2001年.
- (21) 資本過剰問題をめぐっては, 『市場社会の未来——可能性としての「経営学」——』(篠原三郎・中村共一編著, ミネルヴァ書房, 1999年)の序章を参照されたい.
- (22) この問題については, 下記の拙稿を参照されたい.
篠原三郎「だから人間はつねにみずから解決しうる問題のみを問題とする——社会科学方法論をめぐって——」, 『現代と文化』第104号, 日本福祉大学, 2001年.
- (23) フェティシズム問題については, 注(17)の拙稿以外に, 丸山圭三郎氏の『文化のフェティシズム』(勁草書房, 1984年)を参照されたい.

(後記)

本稿執筆後, 本稿で言及もしておいたボランティアについて下記のような労作に出会い, 啓発された. 紹介しておきたい.

馬頭忠治「協同する市民とボランティア」, 『共同探求通信』18号, 編集発行: 清真人, 2001年.